

SEISEKI ZINE

聖蹟人



theme
いつくしむ人
人も自然も愛おしい。
聖蹟桜ヶ丘には
豊かな愛に満ちた冬がある。

Take Free

BALL. × 京王電鉄

We love SEISEKI

キツネパンの店内にて Photo:大森悠史

セイセキ ZINE とは？
セイセキ ZINE (セイセキジン) は毎号1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャーする、市民参加型ローカルマガジンです。多摩市在住の有志の市民クリエイターを募り、セイセキ愛に満ちた誌面づくりをしていきます。

#8



セイセキ ZINE

2026年の無病息災を祈ろう!

開催エリアは10カ所以上、 「どんど焼き」のABC

多摩市の各地域で行われる、冬の風物詩・どんど焼き。中でも、多摩市立多摩第一小学校で開催するどんど焼きは、大掛かりでインパクトがあると聞きつけ、その工程に密着してきた!

Interview、Text : Satomi Yoshioka / Photo : Yuto Oi

SEISEKI
PEOPLE
1



[写真左から]
榎 直子さん、大沼 君枝さん
榎さんは多摩市青少年問題協議会（青少協）第一地区委員会の会長、大沼さんは副会長を務める。年間の行事をふたりで取りまとめている。

地域の伝統行事と 子どもたちをつないでいく

校庭に組まれた大きなくら（やくら）が勢いよく燃え上がり、集まった人々の思いを込めて、天へと昇っていく。1月15日前後の小正月になると、無病息災や五穀豊穡を祈願して行われる、どんど焼き。「多摩市でも10カ所以上の地区で、趣が異なるどんど焼きを開催しているんですよ。たとえば、東寺方地区は四角錐の形をしていたり、本当にさまざまなんです」と説明してくれたのは、多摩市青少年問題協議会

（青少協）第一地区委員会会長の榎直子さん。どんど焼きとは、もともと平安時代の宮中行事「左義長（さぎちやう）」で、正月飾りや書き初めを燃やして、その炎で厄を払い、健康を祈るものとされる。多摩市でも、かつて「セーノカミ^{※1}」という行事が行われていた。これは男の子たちが村々の正月飾りを回収、道祖神のそばに小屋を作り、14日の夜にお焚き上げをするもの。この行事は、太平洋戦争頃に姿を消し、戦後しばらくは行われなかったが、子どもたちがリヤカーで材料を集めてくら作りをするなど、復活させる地区が増えていった。地域が協力する形になったのは、約40年前。現在は、榎さんら実行委員会をはじめ、地域住民、小中学校PTA、おやじの会^{※2}、ボランティアの中学生らが力を合わせ、本番約4ヶ月前から準備を進めている。「まず10月に、くら用の藁を干すための、すずめぼっち^{※3}作りを行います。最初は役員やPTAだけの参加でしたが、お母さんと一緒にきたお子さんが楽しそうに作っていたんです。そこで学校で募集してみようかということになって。それが今も継続しています」と榎さん。さらに12月～翌年1月に当日食べる団子を付ける竹、くら用の青竹を伐採する作業

もある。「藁も竹も地域の方からのご厚意で提供いただくものがほとんど。材料の切り出しや運搬も人や地域のつながりで参加いただいている、本当に助かっています」（榎さん）。どんど焼きを支えるのは大人だけではない。当日振る舞う豚汁作り、団子付け、くら飾りは中学生の定番。「どんど焼きから、人や地域のつながりを子どもたちに感じてもらえれば」（大沼さん）
第一地区のどんど焼きは高さ約5m。シンプルでダイナミックと評判で、数年前から和太鼓演奏も行われている。点火と同時に大太鼓が演奏を始め、燃えている間は打ち続ける。「でも、燃え尽きるのは一瞬。5分くらいで終わってしまうんです」と大沼さん。「4ヶ月がんばって、あっという間に終わる。それでも、達成感はとてもあって、スタッフもそれが楽しいようです」と、榎さんはどんど焼きへの思いを語る。
どんど焼きを盛り上げたいと思う背景には、聖蹟桜ヶ丘のまちの魅力もあるという。「いろいろな方とお話して、地元の人が本当に優しいなと感じます。程よく田舎で暮らしやすいんです（笑）」という榎さんに大沼さんは、「川や山があって、自然も豊か。新しいものもあるし、昔のものが大切にさ

れ、残っているのも魅力的」と応える。「せいせきカワマチができてからは、新しいことをやりたい人たちが増え、聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントさんのバックアップもあり、次から次へと催し物が行われていますよね。みんなこのまちが好きなんだと感じています」と笑顔を見せる榎さん。
最後に、令和8年度のどんど焼きの意気込みを伺った。「やっとコロナ禍から完全復活できたところですから、まずは無事に開催したいです」（榎さん）、「どんど焼きは、雨や雪が降ってもやっています!! ぜひ遊びに来てください」（大沼さん）
※1 塞の神のことで、道祖神をいう
※2 多摩第一小学校、父親有志の会
※3 一般的にはわらぼっちと呼ばれている



[写真上] 中学生が手伝い、お団子もスタンバイ。
[中・上] 約5mのくらが燃えさかる様子は圧巻。
[中・下] どんど焼きの間、多摩市の「和太鼓せいせき鼓桜」による和太鼓演奏が行われる。[下] 中学生ボランティアが調理を手伝う、豚汁。体があたたまる。

【どんど焼きの工程に密着!】



1. 10月初旬。稲刈り後の藁束を拾い集めてまとめていき、すずめぼっちを作る。
2. すずめぼっち作りは、農家が少なくなった今、日本の原風景を知る貴重な体験。このまま2週間ほど乾燥させる。この日は30個ほどのすずめぼっちが完成!
3. 12月にはお団子を付ける篠竹を刈りに。通常600~700本ほど伐採する。
4. 年明けにはどんど焼きの骨組み(=くら)用の青竹を伐採しに行く。スタッフはもちろん、地域の植木屋さんらの参加も心強い。



[写真上左・下左] 開店 11 時にずらりとパンが並び、一番のおすすめは、湯だねを使用して作ったカントリーブレッド。[上右] お客さまからのリクエストもあり、夏から冷蔵庫を置き、サンドイッチやデザート系のパンも販売。[下右] キツネのロゴは、喜壽屋さんの奥さまが考案。ユニフォームも、イエロー×茶のキツネカラーを意識しているそう。

売り切れごめん、多摩市の新しいパン屋さん。 地域住民のリクエストに応える。 焼きたてはいかが？

背中を向けてころんと寝転がったキツネのロゴが、なんともキュート♡
平日の昼間から行列ができる、今話題のパン屋さんの魅力を探ってみました！

Interview : Nobuko Matsutake / Photo : Yufumi Omori

丁寧に発酵させて 作り上げた名物パンたち

今年の春にオープンした「キツネパン」。昨年、惜しまれつつ閉店したパン屋の跡地にできたというだけあり、当初からまちの住民たちからの期待値は高かった。現在、その期待に応えるかのように、日々焼きたてのパンを作り、好評を得ている。「僕は、代官山の『シェ・リュイ』で12年ほど働き、その後何店舗かで修業しました。店を出そうと考えたとき、リサーチをしていくうちに都心から少し離れたこの場所はパンを日常的に買ってくれる方が多そうだなと思ったんです。それと僕が『耳をすませば』が好きなので、

それも決め手でしたね(笑)」と店長の喜壽屋龍さんは笑う。実際お店を開いてみたら、店前に行列ができると隣のお店の方が看板を出してお客さまを誘導してくれたり、地域の人たちのあたたかさを感じているのだそう。店内の陳列棚もオープンな仕様にして、お客さまと交流を持てるようにしている。「新商品を作るときは、家族やバイトさん、お客さまにも声をかけて試行錯誤しています。価格が手頃という声も聞きますが、たとえばオーソドックスなあんぱんは180円、でも長時間発酵させて手間ひまかけて作るパンは少し値段を変えています。商品によって値段に差をつけて、より幅広い層の方に楽しんでもらえるよう

に心がけています」 「キツネパン」という店名は、家内安全のご利益のあるお稲荷さんが由来。パンを買って自宅で食べ、幸せになってほしいという願いが込められている。「オープンして1年目なので、地盤を固めるのが第一。今後は、マルシェだったり聖蹟桜ヶ丘のイベントにも参加して、もっとまちと関わっていききたいですね」

KITSUNEPAN (キツネパン)

● 多摩市馬引沢2-12-3
シャトルブラウンA102
☎ 11:00～17:00 休：火、水
📍 <https://www.instagram.com/kitsunepan.mahikizawa/>

SEISEKI PEOPLE 2

喜壽屋 龍さん

製パンの専門学校を卒業後、『シェ・リュイ』(代官山)など都内のパン屋で修業し、今年の春にキツネパンをオープン。20～30種のパンの製造をひとりで行なう。

体を動かし、身も心もいつくしむ時間

多摩市に武道あり!? 多摩市立武道館が映す、「健やかな日常」

多摩東公園の一角。木々に囲まれた武道館で、いま静かな熱気が生まれている。金曜日の午前中、太極拳クラスが描く「没頭する時間」にクローズアップ。

Interview, Text : Akira Andoh

太極拳クラス (個人開放)

毎週金曜の午前中の太極拳のクラス。20年以上続く老舗クラスで、毎回60人近くが参加。券売機で「個人開放(床)」を購入すれば参加可能。



指導員の皆さん。写真左から田口さん、蓬田さん、安藤さん、若林さん、山崎さん。全員が有資格者で、呼吸や姿勢の整え方も丁寧に伝えている。



参加者は60代から90代まで。各々が自分のペースで「からだ」と「こころ」を整える。広々とした体育館で、みな無心に太極拳に没頭している。

多摩市立武道館スタッフに聞きました!

団体、個人問わず、多くの方に活用いただけるとうれしいです。最近では会議室を使ったヨガやZEROエアロのワнтаイムレッスンも人気です。無料開放のイベントや、SNS発信なども積極的に行っていますので、お気軽にのぞいてみてください!(多摩市立総合体育館 朝長 修平さん)



静かに、しなやかに。太極拳で心身を整える

武道を楽しむ市民を支える多摩市立武道館。個人としても活用でき、予約不要で一回から参加できる「個人開放」というプログラムの中で、金曜午前の太極拳クラスは特に人気が高い。「最初は市のスポーツ振興課から頼まれて、市民に太極拳を教えたのがきっかけでした。もう20年ほどになりますね」穏やかな笑みで語るのは、多摩市太極拳連盟会長の安藤育子さん。現在、金曜日のクラスには60代から90代まで幅広い世代が集い、ほとんどが近隣の住民だという。「試験や大会を目指す方もいますが、基本は健康のため。無理をせず、「続けられる」ことを大切にしています」。ゆるやかな動作は筋肉を伸ばし、関節を守り、心を落

ち着かせる。緊張をほぐしながら動く時間が日常のリズムを整えてくれる。毎週通っている山口と子さんは「休みたくないんです。やると体が軽くなる」と笑う。70代で始めたが、「指導が丁寧で、続けやすい」と話す。太極拳にはさまざまな流派があるが、主に教えているのは「制定拳(せいいていけん)」と呼ばれる基本形だ。過去には空手もやっていた辻良二さんは「基本の形をずっとやっていると、以前は動かなかったところが動くようになっていくんですね。これが楽しいんだ」と笑う。満洲生まれの小亀めぐみさん(95歳)は、幼い頃に公園で太極拳をしている人々を眺めていたという。「そのゆったりした動

き子ども心にきれいだね。今、自分がやっているなんて不思議」と微笑む。30年近く続ける中で転倒も減り、体の動きが滑らかになったと話す。安藤さんは「太極拳には終わりが無い」と語る。「続けるうちに「内面を整える」という感覚が分かってきます。気分が沈む日も、体を動かすと心が整うんです」静かな呼吸とともに腕を伸ばす参加者たち。多摩東公園の一角には、健やかな日常のワンシーンが描き出されていた。

多摩市立武道館

● 多摩市諏訪4-9
☎ 9:00～21:15 休：第3月曜日
☎ 042-371-8421



総合体育館 HP ▲

6 Stories in Tama River

あなたのおき瞬間を教えてください

多摩川にまつわる 6つの“ささやかな”ストーリー

せいせきカワマチが誕生し、まちの人たちの川への関わり方にもゆるやかな変化が訪れている。愛犬と散歩したり、子どもと遊んだり……。自分らしく楽しむ、一人ひとりの“多摩川ストーリー”を現地で聞いてみた。

Photo : Yufumi Omori, Yuto Oi



働きながら眺める景色

私は川沿いにあるウェルネスクラブ「RIVER PARK」で働いています。多摩川は、さまざまな自然との関わり方を教えてくれる川。せいせきカワマチもできてさらに盛り上がりを見せています。ここで出会う笑顔や体験を通して、人とまちがつながる風景をこれからも創ってきたいなあとと思っています。(酒井さん)



STORY

1



STORY

2



STORY

5



STORY

6

府中四谷橋

多摩川

京王線

関戸橋

STORY
1



子どもの遊び場

せいせきカワマチができて、ふかふかの芝生がお気に入りです。公園も好きだけど、同じくらい子連れで遊びに行きやすいなあと思っています。自然との距離が近いので、今日は息子と一緒にてんとう虫を大量にGET(笑)。息子は電車も好きなので、鉄道橋の近くまで行って眺めていると、警笛を鳴らしてくれる運転手さんもいてうれしくなります。(岡田さん)

STORY
5



STORY
5

STORY
2



愛犬との癒しの時間

多摩市に住んで30年ほど。愛犬を招いて4年くらい経ち、週末の朝散歩が習慣になっています。交通公園から川沿いを歩き、駅を通過して連光寺まで、Uの字のルートをゆっくり2時間くらい歩きます。愛犬が川と電車が好きなので、2人+1匹で眺めながら癒されています。(桑野さん)

STORY
1

STORY
2

STORY
6

STORY
4

STORY
3



カメラを持って散歩

多摩川が好きなのは、日々変化しているところ。カメラを持って歩いていると、春夏秋冬、小さな変化に気付けるところが楽しい。空や川の流れ、人、鳥、植物の姿も同じ日はありません。そんな瞬間を見つけ、写真に収めています。(大井さん)

STORY
4



はじめてのチェアリング

多摩川の近くに引っ越して7年。“みみすま”の舞台と言われるこのまちに住めてうれしいです！30代になったことをきっかけに、「のんびりしよう」と価値観の変化が訪れ、チェアリングに挑戦。イスと簡易テーブルだけでこんなに心地良いとは！ここ数年で多摩川河川敷付近の開発が進み、子どもも増えて活気が出てきたのはすごくいいですね。(山田さん)

川沿いでスポーツ

多摩川の河川敷にテニスコートがあること、ご存じですか？実はここ、テニス好きの市民が愛する、穴場スポットなんです。使用料は2時間でなんと730円！コートのまわりに芝生が多いのでサーブも思いっきり打ちやすい。僕は妻とよく行きますが、川辺の景観もよく、日々の忙しさと距離を置ける、リフレッシュスポットなんです。(大森さん)

時計の針は「江戸から昭和初期」にかけて、「鵜飼」で賑わった、“多摩川”昔話

はるか昔から人々の暮らしに恵みをもたらしてきた多摩川。今回はそんな多摩川で栄えていたといわれる、鮎漁と鵜飼の歴史をたどりました。

Text: Satomi Yoshioka

「鵜飼」は観光業に発展



当時、人気だった川魚料理屋「井上亭」の鵜飼(大正12年)。なお、井上亭の遠い先祖は、木曾義仲の家臣・井上九郎光盛だと伝わる。資料:多摩市史 民俗編「関戸地区井上亭の鮎漁(大正12年)」 ©多摩市デジタルアーカイブ

鮎漁の手法のひとつ「鵜飼」は、観光業として世の中に浸透していった

多摩市の北側を流れる多摩川には古くから、飲み水や稲作用水としての利用に加え、漁業が行われるなど、人々の暮らしや文化と関わってきました。魚の宝庫でもあった多摩川では、川の地形や状況、魚の習性を利用し、100種類以上のさまざまな漁法で漁が行われていました。特に鮎は有名で、鎌倉時代の文献にも記されています。

「鵜飼」もそのひとつで、江戸時代から行われていたそう。有名な「長良川鵜飼」のように船に乗って行く「船鵜飼」に対し、多摩川は漁師が川に入る「徒歩(かち

鵜飼)で、鵜使い(鵜匠)が2羽の鵜を操り、2名の勢子(網を引く人)が鵜先網で鮎を寄せて捕らえるという独特な形式でした。江戸時代將軍家には「御菜鮎(または「御用鮎」)。後に「上ヶ鮎」とも称される)」という鮎が献上されました。さらに將軍家が川狩(川漁のこと)を行う御成場として、多摩川の一部区域を「御留川(おとめがわ)」とし、御用の鮎漁以外を禁止したこともあったそうです。

また「將軍御上覧」の鵜飼が行われ、八代將軍・徳川吉宗をはじめ、歴代將軍や徳川一族、御三卿[※]らが遊覧を兼ねて、たびたび漁獵を見学。維新後の明治14年(1881年)には、明治天皇の天覧鮎獵が催され、鵜飼を披露しています。

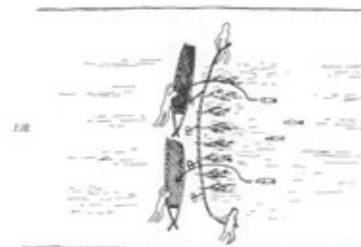
明治22年(1889年)、甲武鉄道(JR中央本線の前身)の新宿~立川間が開通し、郊外に足を伸ばす人々が増えると、多摩川は行楽地としても注目されるように。川辺の景色を楽しみながら、鵜飼による鮎料理を味わえる料亭が、川の流域に何軒も開かれ、多摩市周辺には、関戸の料亭

「井上亭」、立川の「丸芝亭」「中村屋」「伏見亭」、日野の「玉川亭」があり、都会から数多く観光客が訪れました。多摩川の鵜飼を満喫できる屋形船は、大正~昭和初期頃まで見られたそうです。

鮎の宝庫だった多摩川ですが、戦後、その姿は一変。1960~1970年代、高度経済成長期に入ると、汚水流入が増加して水質は悪化。鮎も急激に数を減らします。しかし、多摩川の水質改善のため、行政、民間による多岐にわたる取り組みが行われ、2025年の推定遡上数は昨年(約37万尾)の3倍以上、約132万尾を記録しています。上様も舌鼓を打ったという鮎。多摩川では、ルールを守れば、今も釣りを楽しめますので、鵜飼ならぬ太公望のように釣り人を気取ってみてはいかがでしょうか。

※御三家と同様、將軍の跡継ぎ輩出を目的に創設された、田安德川家、一橋徳川家、清水徳川家の総称

参考資料:多摩市デジタルアーカイブ「鵜飼」「多摩川鮎獵の天覧」、立川市歴史民族資料館 資料館見学の手引き「多摩川の漁法と漁具」、稲城市郷土資料室「多摩川の鮎漁(あゆりょう)」、せいせき観光まちづくり会議「歴史の散歩道 関戸~寄り道」



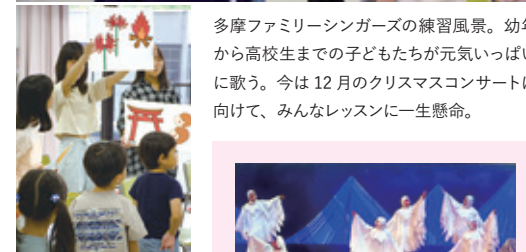
漁業の盛んな多摩川では、釣竿や投網をはじめ、各種の漁法が発達。図は、遡上する鮎の障害物を飛び跳ねる性質を利用した「跳ね網」。資料:多摩市史 民俗編『跳ね網』

子どもの心をのびのび育てる、歌のチカラを伝えたい 創立48年、「児童合唱団」が大切にする “地域の眼差し”

いきいきと歌い上げる子どもたちに、いつくしみの眼差しを向ける。長年、聖蹟桜ヶ丘の地で児童合唱団の指導や、童謡の伝承を行う、高山佳子先生。先生が思う歌の魅力とは?

Interview: Yuko Miyake / Photo: Yufumi Omori, Yuto Oi

SEISEKI PEOPLE 4



多摩ファミリーシンガーズの練習風景。幼年から高校生までの子どもたちが元気いっぱい歌う。今は12月のクリスマスコンサートに向けて、みんなレッスンに一生懸命。

過去の公演を振り返り

[写真上]宮沢賢治原作の『ゆきわたり』のオリジナルミュージカル。[下]『白雪姫』のワンシーン。可愛らしい衣装は合唱団の「母の会」が48年管理し、代々受け継がれているもの。



高山 佳子さん

多摩市在住。国立音楽大学声楽科在学中から、子ども向け音楽番組に出演。多摩ファミリーシンガーズ、多摩童謡友の会などを立ち上げ、活動を行う。

多摩ファミリーシンガーズ事務局

多摩市桜ヶ丘1-49-5
042-375-8558
email: info@tamasingers.org

ただ楽しいだけじゃない 歌は子どもの成長を促すもの

子どもの頃から歌やバイオリン、ピアノなどを嗜んできた高山佳子先生。現在は、童謡詩人でもある北原白秋の研究をライフワークとしながら音楽活動を行っている。「児童合唱団である、多摩ファミリーシンガーズは1977年に始めました。一生懸命練習し、努力したことを褒められると、子どもの心が育っていくんですね」子どもたちの中には内気でお出の

が苦手な子もいる。その子が一番輝くところを引き出し、自信を持たせるのが自分の役目だと高山先生は続ける。「クリスマスコンサートや、年に何回か公演があり、大人がメインのオペラに子どもたちが混ざって出演することも。大きな舞台上に立てば子どもも緊張しますよね。でも、子どもたちががんばっている姿に観客の皆さまから拍手をいただく。そうすると自信がみなぎってくるわけです。その誇らしさを味わってほしいです」公演のために努力し、その努力が報われる経験をしてもらいたいと高山先生。

「老人ホームなどで歌うと高齢の方々が喜んでくださいます。歌で人の役に立てることは素晴らしいということを感じてほしい。私も歌って人に喜んでいただくことが何よりの生き甲斐です」この想いは、童謡を次世代に伝える童謡友の会を始めるきっかけにもつながった。童謡は子ども向けだと思われがちだが、戦争や平和を願う気持ちなど、世相を反映する大切な文化だ。童謡を歌うことで心を豊かに育み、幸福に長生きしてほしい。それが、多摩の方々に向けて音楽を続ける高山先生の大きな願いだ。



「地域と子どもの成長」をいつくしむ

「書道は文字を美しく書く芸術です」 地域愛に満ちた書道家の願い

自身も幼い頃から書に親しみ、経験を積んできた上杉華澄さん。子どもへの指導だけでなく、地域との関わりも大切にしている上杉さんに話を聞いた。

Interview、Text：Hisaco Sato/ Photo：Yufumi Omori

考え抜く力を大切に。 書を通じてつながる輪

一ノ宮エリアの住宅街に突如現れる「書道」の文字。外壁に掲げられたこの看板を目印に、子どもたちが集まってくる。ここは45年以上続く書道教室、書韻会本部。「幼い頃から、書くことが身近でした。できなかったことができるようになること、書いたら書いた分だけ自信につながることに面白さを感じ、取り組んできました」と会長の上杉華澄さんは語る。幼いときからの実体験があるからこそ、生徒との関わり方についても、気づきを促し、主体的に取り組めるようなサポートに心を配る。ここで育まれた姿勢は、表現力や集中力のみならず、キャリア選択の際などにも力を発揮するのだそう。50年後の子どもたちが幸せにいられるように、日々が豊かであるようにと願って設立された書韻会の精神が宿っている。

生徒は地元のみならず城東地区からも来ており、未就学児から働き世代、シニア

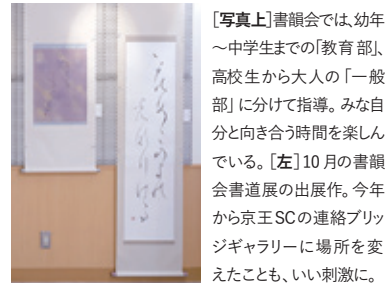
までと幅広い。「お子さんや親子はもちろん、最近は大人の方が増えました。特に日々忙しい方には、没頭できる楽しみ、自身と対峙する時間として大切にされているのかもしれない」と微笑む。

書道を身近に感じてもらうため、数年前から地域イベントにも積極的に参加中。「2025年のKAOFESは母の日と同じだったので、ワークショップで“ママ”や“母”という言葉を書いてもらったら、やっぱりお子さんたちの気持ちが入るんです」

上杉さんが同会の会長となり今年で13年目。2016年には、第38回国際書画展にて内閣総理大臣賞を受賞。さまざまな経験を活かしながら腕を上げることに力を注いでいたが、ここ数年で心地よさを模索し自らの声に耳を傾けることで、気づきも多く得たと話す。「自分の心が落ち着き、幸せである状態を紡ぐにはどうしたらいいのか？心地よく書き続けられることを胸に、自分をいつくしみながら、指導者同士連携し、会を大切に運営したいですね」

上杉 華澄さん

3歳の頃から書道を始め、父が設立した書韻会を継ぎ、2012年より会長を務める。書韻会での指導のほか、展覧会、KAOFESといった地域イベントへの参加など精力的に活動が続いている。



【写真上】書韻会では、幼年～中学生までの「教育部」、高校生から大人の「一般部」に分けて指導。みな自分と向き合う時間を楽しんでいる。【左】10月の書韻会書道展の出展作。今年から京王SCの連絡ブリッジギャラリーに場所を変えたことも、いい刺激に。

書韻会本部

多摩市一ノ宮 2-24-29

☎ 042-371-2188

※お申し込みやお問い合わせは上記までお電話ください。

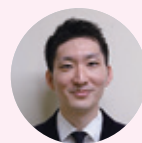
SEISEKI PEOPLE 5



京王聖蹟桜ヶ丘 SC 便り

この街を『いつくしむ』
きっかけになれば…

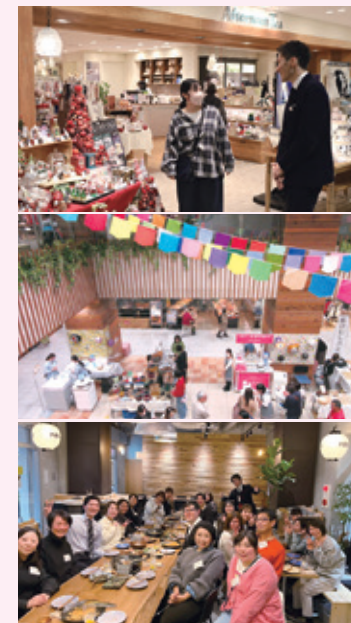
お客様の
印象に残る
SCづくり



今回紹介するのは…
京王聖蹟桜ヶ丘 SC
大塚 捷人

せいせき
京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター

京王聖蹟桜ヶ丘 SC ではテナントさんと共に、季節や行事に合わせた空間づくり、お客さまに寄り添った心のこもった接客など、何気ない日常の瞬間をいかに楽しんでいただけるかにチャレンジしています。また、もっと地元・多摩エリアのことを色々な方に知ってほしいという想いのもと「せいせきツナガルマルシェ」(B館2階センターコート)では、お客さまと地域のお店さま、SCテナントとのつながりを育みたいという思いを大切にし、私も営業担当として、SCで取り扱っている良質な商品を知っていただくために、テナントさんに商品体験イベント場として出店を企画依頼しています。私は営業担当なので日頃、お客さまと直接お話しをする機会は多くはありませんが、毎日館内を歩き、テナントさんとの対話からよりお客さまに喜んでもらえるSCづくりを目指しています。



【写真上】B館3階にある「アフタヌーンティー・ティールーム」のスタッフと談笑する大塚さん。【中】2025年10月25日と26日に開催した「せいせきツナガルマルシェ」の様子。【下】年1回、テナントのスタッフと懇親会を開催し、交流を深めている。

あれ気になる??
歩いて見つけた

セイセキの 珍光景



小野神社にはハートの石があり縁結びのご利益で有名。ハートは魔除けとなる「猪の目」に似ていることもあり、かたどりにくくなったと語る優子さん。この時期、落ち葉アートを作っていると参拝者の方や地域の方々にさらに声をかけられるようになったそう。SNSに上げられることも増え、その意義を感じている。「境内にはほうきが立てかけてあります。よろしければ皆さまも一緒に(笑)」。拝殿には優子さんが描いた干支画が祀られ、御朱印として拝受可能。あわせて御朱印集めをしてみてください。

仕掛け人は私♡



小野神社で発見♡“ハート型”の落ち葉

まるでアートのようにハート型に集められた落ち葉があると聞きつけて、小野神社へ。この落ち葉アートを作っているのは、神主(小野神社禰宜)の滝瀬優子さん。「私はもともと画家・絵本作家として活動していて、数年前から全国各地の神社に自身の絵本を奉納させていただいていました。小野神社には、2019年に瀬織津姫のお札をいただきに伺い、絵本を奉納。その出会いをきっかけに今の宮司と結婚することに(笑)」。このハート型の落ち葉を始めた



のは、2021年のコロナ禍から。「参拝者さまが少しでも心安らげばと願い、私自身も人の心を癒したい想いで絵を描いているので、その延長で始めました」

一期一会の出会いを大切に 古いものを愛し、広める 「SAJI」のストーリー

服を愛し、古着を選ぶ楽しさを教えてくれる、古着屋「SAJI」のオーナー・大和直子さん。長く多摩エリアでお店を営んでいるからこそ感じる、まちの魅力を伺った。

Interview、Photo：Misaki Watanabe



色とりどりの洋服が並ぶ 店内は穏やかな時間が流れる

「接客する際はこちらからはあまり声をかけないようにしているんです。お客さまが自分で選ぶ感覚や時間を大切にしてほしいので」と話すのは、オーナーの大和直子さん。この場所は、近くに保育園があり、目の前には交番があって小学生たちが挨拶する姿が目に入る。そんなのんびりした空気が気に入っている。「以前は、大栗川沿いに『マメトラ』という



年代や国にこだわらない、大和さんのセレクトが魅力。内装は、「スタジオメガネ」(小誌#4に登場)が手掛ける。もとはクリーニング屋だったという物件を活かし、高い位置にハンガーをかけ、ディスプレイしている。福祉施設発のオリジナルクラフトも販売中。福祉の仕事経験からさらに視野が広がったそう。



SAJI (サジ)

多摩市落合 4-8-1 101

12:00~20:00

(日)10:00~18:00

休：月・木

https://www.instagram.com/saji_used

6 SEISEKI PEOPLE

大和 直子さん

多摩市出身。母の影響で子どもの頃から古着に興味を持つ。聖蹟桜ヶ丘で2021年まで古着屋「マメトラ」を経営。その2年後に落合団地商店街に「SAJI」をオープン。

古着屋を経営していました。もともと洋服が好きだったことと、10代の頃から自分で店を持ちたいという気持ちがあり、生まれ育った多摩市でオープンしました。多摩市は緑の多いまち。高齢者やお子さんも多く、みんなが人に対してやさしいという印象です。都心の大きなまちでなくても多摩市で十分に楽しく商いができる。まちの魅力のひとつになれたらと思い、経営を続けていた。そんなあるとき、ふと古着に対する自分の思いに疑問を持つようになったそう。「このまま古着をずっと好きでい続けられるのだろうか、なんとなく感じたんですね。それで思い切って店をたたみ、興味のある福祉系の仕事に就くことにしました」と大和さん。

ハンディキャップを持つ方たちが働けりサイクルショップの服飾部門で働き、天職かと思うほど楽しかったと振り返る。だが、働く中でやはり古着への愛がふつふつと湧き上がり、古着屋へとカムバック。「『マメトラ』を閉店して、『SAJI』を開くまでの2年間。これは私にとって自分を見つめ直す、大切な時間でした。古着は、作りがしっかりしていて質が良く、さらに1点ものという魅力があります。また、持ち主の思い出を感じられるものなので、買い取る際に、どんな思い出があるかお聞きしたりしています」

「マメトラ」のお客さまだったという「スタジオメガネ」の方(落合団地商店街にある、一級建築士事務所)に今の物件を紹介してもらい、「SAJI」をオープン。長くこの地にいるからこそ、自然につながりも生まれてくる。「今、近隣の古着屋さんと一緒に『古着市場』というイベントを年2回ほど開催しています。多摩市にも古着屋があるということをもっと知ってもらうために、活動していきたいですね」



多摩市役所 市民経済部 経済観光課では「あなたの想いをカタチにします」というスローガンのもと、創業をお考えの方や創業間もない方、すでに事業経営を行っている方を対象に、創業相談、経営相談を実施中。相談日時や相談会場については多摩市のホームページにてご確認ください。写真右が藤原真由美さん。



多摩市創業・
経営支援事業推進員として、
これまで10年近くにわたり、
創業・経営相談をしてきた、
多摩市職員の藤原さん。
行政の立場で
年間約200件の相談を受け、
多摩市の発展を見つめてきた。
聖蹟桜ヶ丘エリアの
まちや人の魅力は
どんなところにある？

多摩市 市民経済部
経済観光課 商工観光担当
藤原 真由美

×
京王電鉄
聖蹟桜ヶ丘プロジェクトチーム
横尾 聡美

横尾——藤原さんは、多摩市で創業を考える方や事業を行っている方を対象に、相手の立場に立ってさまざまな視点で相談に乗り、アドバイスをしてきたと伺っています。はじめに、聖蹟桜ヶ丘のまちや人の印象について聞かせてください。

藤原——都心へのアクセスが良く、駅前を中心に賑わいがあり、とても住みやすいまちだと感じています。川とまちが近接する豊かな環境を活かし、「せいせきカワマチ」をはじめとして、さまざまな場所で市民主体のイベントも行われていますよね。アニメやドラマの舞台とされる聖地もあり、まち歩きを楽しめるところも魅力的です。

横尾——一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントの一員として「せいせきカワマチ(多摩川河川敷芝生広場)」の運営に携わる中で、私自身も「川のある豊かな日常」って素敵だなあと感じています。地域の方々と接する機会が多くありますが、皆さん、聖蹟桜ヶ丘への愛に溢れ、自分たちが主体となってまちを盛り上げる気持ちがとても強い印象があります。

藤原——多摩市創業・経営支援事業推進員として日々、多くの方と接する中で感じているのは、多摩市を愛しているからこそ、市内で事業を営んでいた、自分の思いやアイデアを形にするために創業に挑戦する

方々が多くいらっしゃる。ビジネスは多種多様で可能性は無限大です。「皆さんの想い」に寄り添いさまざまな形で支援し、サポートしていけたらと思っています。

横尾——夢の実現に向けて創業や経営に踏み出している方々に対し、私たちが何かしらの形でご支援できたらと考えています。地域の方々が企画を持ち寄って出店・出演する「せいせきカワマチオープンデー」(編集部註：2024年6月に始動し、これまで4回開催)の企画検討をしていた際、藤原さんにご連絡したことをきっかけに、多摩市内で創業をお考えの方や創業間もない方に多くご出店いただいています。

藤原——さまざまな可能性を秘めた出店者をご紹介してきました。オープンデーへの出店をきっかけに、地域の方々に広く知ってもらえればと思います。

横尾——手芸教室を営んでいる方だったり、クッキーやベーグルを作る方だったり、毎回、ご紹介いただく出店者を楽しみにしています。

藤原——聖蹟桜ヶ丘を「テストマーケティングの場」とし、多摩市を拠点に多摩エリアや都心、夢は大きく全国に羽ばたいてくれたとしたら、創業・経営相談に長く携わってきた一人として冥利に尽きます。

横尾——今後も多摩市とさまざまな取り組みをご一緒できれば嬉しいです。



誌上レポート

「セイセキZINE」連携リアルイベント

あつまれ!セイセキZINE
ポップアップマーケットを開催しました。

2025年11月3日、「せいせきカワマチ(多摩川河川敷芝生広場)」にて本誌に登場したグルメやワークショップなどが集まる“1日限り”のマーケットを開催。ここでは、賑わいをみせたイベント当日の様子を誌上レポートします!

本日は文化の日。“川のある豊かな日常”をテーマに、一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントが運営管理する「せいせきカワマチ」にて、ポップアップマーケットを開催。名付けて「あつまれ!セイセキZINE」、これまで本誌に登場した方々が集う、リアルイベントだ。時計の針は午前11時、気温は17度。空気がきれいに澄んだ清々しい天気の中、いざスタート。「皆さん、おはようございます。今日は聖蹟桜ヶ丘の自然と遊びましょう!」と、参加者に話しはじめたのは「365日野草生活のんさん」(#3登場)。「あつまれ!多摩川野草ツアー」と題し、のんさんがナビゲーターとなり、植物や生き物を観察しながら楽しく学べるプログラムだ。時を同じくし、「ストライドラボ多摩」(#7登場)オーナーによるWALK & RUNもスタート。参加者の皆さんが入念にストレッチした後、「行ってきま〜す」と笑顔みせ、颯爽と会場を駆け出していった。30分ほどの天気雨の後、時刻は13時。空から太陽が覗き、トークセッションが

始まった。急遽、参加してくれることになった多摩市長・阿部裕行さんの挨拶にはじまり、本誌の企画と制作を担うメンバーによる“制作裏話”に耳を傾ける、出店者と来場者の皆さん。主催の聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメント/京王電鉄の山崎さんからは「本イベントをセイセキZINEに登場した店舗と読者とがリアルにつながる場にしたい」という想いも聞けた。「美術ひろばタネノス」(#2登場)や「桜ヶ丘陶芸倶楽部」(#4登場)によるワークショップ、「三丁目の家」(#1登場)による読み聞かせやアコースティック演奏も好評のご様子。「RIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘」(#2登場)によるフリーヨガの参加者の皆さんも芝生広場で心身をリフレッシュ。“聖蹟桜ヶ丘グルメ”に舌鼓する来場者の皆さんの笑顔も印象的だった。イベント開催中、強風に見舞われるなど、気まぐれな天候に翻弄されるひとコマもあったが、無事16時に「あつまれ!セイセキZINE」は終了したのです。次回開催はあるのか? 乞うご期待あれ。



[写真上] のんさんの野草ツアー。[中左]「RIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘」によるフリーヨガ。13時30分と15時の2回開催。[中・中]「ストライドラボ多摩」によるWALK & RUNの準備運動の様子。[中右]「桜ヶ丘陶芸倶楽部」による陶芸ワークショップの様子。[下左]「美術ひろばタネノス」による工作ワークショップの様子。[下中]クラフトビールの専門店「BEER BULK」は百草園団地(日野市)内の醸造所で製造したクラフトビールを販売。[下右]「和菓子処 花鳥風月」も人気商品を揃えた。

出店者は?

- BEER BULK(クラフトビール)
- おもすびカフェくさびや(おもすび・惣菜・ドリンク)
- LATTEGRAPHIC(フード・ドリンク)
- とり太郎(揚げ物・お弁当・サワー)
- 和菓子処 花鳥風月(和菓子)
- TANUKI STUDIO(アパレル)
- 美術ひろばタネノス(インスタレーション・ワークショップ・画材販売)
- 桜ヶ丘陶芸倶楽部(陶芸ワークショップ・陶器販売)
- 三丁目の家(アコースティック演奏・読み聞かせ・多摩土産野菜販売)
- ストライドラボ多摩(アルトラシューズ試し履き・フットヘルス相談)
- RIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘(フリーヨガ・スラックライン)
- 365日野草生活のん(多摩川自然観察会)
- セイセキZINEライブラリー(本部・展示・ノベルティ)



[写真左上] アコースティックギターを持ち、会場を盛り上げる「三丁目の家」の松尾さん。[上右] 聖蹟桜ヶ丘の名物、「三丁目の家」くべる会のブース。[下左] 本誌企画・編集チームによるトークセッション [下右] 多摩市長の阿部裕行さん。



AIアバター駅係員「こころ」による
お客さま向け案内サービスの実証実験を実施中
地域に密接に関わる存在を目指し、聖蹟桜ヶ丘駅の東口改札に設置中

「日本一安全でサービスの良い持続可能な鉄道」の実現に向け、お客さま視点の施策をさまざまに推進する京王電鉄。現在、聖蹟桜ヶ丘駅・東口改札に設置中のAIアバター駅係員「こころ」による実証実験も、その取り組みの一つだ。

本企画を担当する京王電鉄・清水さんに話を聞くことができた。「AIアバター駅係員『こころ』は、アバターや生成AIを活用したサービス開発に強みのある AVITA 株式会社と共同で開発し、駅の特性や顧客ニーズに合わせた適切な情報提供と駅係員の案内業務サポートを目的に進めている実証実験です。設置している案内タブレットのアバターにお客さまから話しかけると、AIを活用して『お忘れ物について』『駅構内や周辺施設』『お手伝いが必要な案内業務』などを自動回答します。お客さまを検知すると、オペレーターによる能動的なサポートもできる仕組みです」

「こころ」の命名の由来を尋ねると、「こころは、近未来的な服装の新人駅係員としてお客さまとの会話を通して成長していきます。AIという“心”を持たない冷たいイメージがありますが、アバターとして人が操作することも想定済なので、新人駅係員としてお客さまと“心”を通わせる役割も担っているんですよ。お客さまに安心感を与える存在になってほしいという想いから命名しました」

京王電鉄では今後も、鉄道を含めた交通サービスにおいてDXを通じたオペレーションの業務改革や生産性向上を目指しているとのこと。お困りごとの際、地域の人々の心に寄り添う“こころ”と対話してみてください。

今ご紹介するのは…
京王電鉄株式会社
鉄道営業部
お客さまサービス担当
清水 遼



AI(こころ)が答えられない場合や精算が必要な場合は、遠隔操作で駅係員がアバターを通じて質問の回答や精算処理などに対応

「落とし物クラウドfind」をご存じ?

「find」は、落とし主の「連絡するだけでも大変」「探したくても見つからない」という悩み・不安を、テクノロジーの力によって解決するサービス。京王電鉄では2023年2月から実証実験を開始し、同年5月から本格導入中。サービス内容の詳細はQRコードでご確認を。



市民クリエイター募集中!

京王電鉄と情報誌『BALL. (ボール)』を発刊するけやき出版は共同で、聖蹟桜ヶ丘のまちの魅力取材・発信し、地域の価値創造を目指す取り組みの1つとして、市民参加型ローカルマガジンの発行を行っています。本誌は、聖蹟桜ヶ丘“People”ガイドをテーマに、毎月1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャー。本誌では、有志の市民クリエイターとして聖蹟桜ヶ丘の“まちの魅力”を深掘りする方々を広く募集しています。

〔問い合わせ先〕

けやき出版
TEL : 042-525-9909 (平日 9時~18時)
MAIL : e-info@keyaki-s.co.jp

まちの掲示板

地域で音楽活動をする演奏家に“演奏の場”を提供し、良質な音楽を多くの方々に届ける「ヴィータ・コンサート」を開催。ぜひお越しください。
日時:12月19日(金)14時~16時
場所:関戸公民館 ヴィータホール
内容:武山茂 ウクレレソロコンサート~優しい音色で奏です!~
詳細は「たま広報」(11月20日号)をご覧ください。

編集後記

『セイセキZINE #8』でも多くの方たちにご協力いただき、ありがとうございました。#8は、『いつくしむ人』がテーマ。伝統行事や自然、地域の子どもたちにゆるぎない愛情をそそいでいる人取材しました。いつくしみの形は人それぞれ。自分にとって大切な人やモノを思い返すきっかけになればうれしいです。



過去号をすべてアーカイブしたWEB版もぜひ!!

市民クリエイターのみなさん

安藤 賛さん、大井優翔さん、大森悠史さん、佐藤寿子さん、比嘉さやかさん、松竹暢子さん、三宅祐子さん、吉岡さとみさん、渡辺美咲さん